

日本統計研究所報の発刊について

喜 多 克 己

日本統計研究所が設立されたのは昭和21年6月である。創設以来、本研究所の活動の重点は日本の統計制度の改善にかんする研究におかれてきた。これらの経過については『日本統計制度再建史』（日本統計研究所）に詳しく述べられている。

日本の統計制度改善にかんする研究とともに各分野にわたるわが国の統計調査の発達を跡づける研究にも多くの労力がふりむけられた。これらは『日本統計発達史』（日本統計研究所編）としてとりまとめられ出版されている。

ところが最近数年間は研究員の移動、転出があいつぎ研究所活動は事実上、沈滞を余儀なくされるという状態が続いていた。

しかし、この間において、昭和47年4月以降、日本統計研究所は、その管理運営において、法政大学の教職員および院生、学生に対して、その所蔵する統計資料の利用上の便宜を計ることを通して大学の教育研究の目的に沿うよう配慮することになった。

したがって所蔵資料の文献目録の作成が急務となり、ここ1-2年は散在していた資料の整理と分類の作業に追われた。しかし漸く昭和49年10月には所蔵資料の文献目録も完成し刊行のはこびとなった。

同時に、法政大学との密接な関係のもとに学部教員の研究所員兼務などの態勢もつくられ、漸く、統計ならびに統計制度にかんする研究を中心として研究所の活動を再開する段どりにこぎつけることができた。

そして今回、研究所の活動報告として研究所報を創刊することになったのである。

ところで、日本統計研究所の研究課題の重点の一つを、わが国の統計制度をめぐる今日の諸問題の再検討というところに置くことになったのは、戦後急速に再編された日本の統計制度が、近来、社会環境の著しい変化のなかで各種の矛盾を内包、成熟せしめてきているからであり、また、かつて統計制度の改革に大きな役割を果たした日本統計研究所の研究活動の再開にさいして、これがもっともふさわしい重要課題の一つでもあると思われるからである。

こんご研究所報には研究員による統計と統計制度にかんする研究報告を収録してゆくことになるが、そのみにとどまらず、広く統計研究者と中央、地方の現場の統計家との交流の場ともなるようなものにそだててゆきたいと思っている。

1976年3月

(研究員 法政大学経済学部教授)